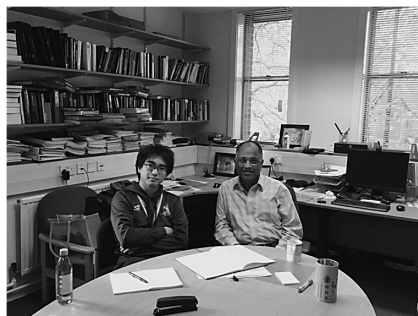


## 60周年記念事業「研究者海外研修支援事業」体験記

田中 未来 (統計数理研究所)

私は研究者海外研修支援事業を利用して2017年10月16日から11月17日までのおよそ5週間にわたってイギリスのサウサンプトン大学に滞在しました。私はこの事業を知ったときに、どこかに行ってみたい気がするものの適当な受け入れ先の候補をもっておらず、どうしたものかと思っていました。このことを同僚の武田先生に相談した結果、快くProf. Mahesan Niranjanを紹介してくださり、彼も快く私を受け入れてくださいました。

Niranjanは機械学習や計算生物学を専門としており、数理最適化を専門とする私とは興味の範囲が少し異なりますが、それはお互いにとってメリットがあったように思います。すなわち、私は数理最適化の新しい応用を知ることができ、彼は優れた最適化モデルや効率のよいアルゴリズムを得ることができるといった具合です。実際、Niranjanや彼の学生のShetta Omarと議論をすることにより、私は機械学習における興味深い最適化問題を知ることができました。また、彼らが解こうとしている最適化モデルに不自然な点があることを私が指摘したことをきっかけにモデルを修正する方向に研究が進みつつあることは、彼らにとってもよかったのではないかと考えています。彼らとは今も連絡を取り合い、共同研究を進めています。



Niranjanと彼の部屋で

このような滞在中では、セミナーなどで研究発表をして自身の研究内容を多くの人に認知してもらうことは重要です。実際、私は別の専攻に所属するDr. Alain B. Zemkohoとセミナーで知り合い、彼と共同研究を開始しました。Alainとは滞在中に頻繁に議論をし、私のセミナーでの発表に着想を得て彼が提案したアルゴリズムを私が実装し、滞在中に簡単な計算機実験を行いました。現在は、Alainが研究の理論部分を、私が実験部分を進めつつ、論文の執筆をしています。このようなこともあるので、セミナーは滞在中のできるだけ早い時期に開催してもらったほうがよいように思います。私の場合は、滞在中の2週目に国際会議に参加するためにイギリスを離れたこともあり、セミナーが開催されたのは3週目の前半でした。これはちょっと失敗だったかもしれません。

5週間の滞在はいま振り返ってみると非常に短かったように感じられます。機会があれば(というより機会を作って)また海外の研究機関で研究をしてみたいという気持ちが湧いてきます。正直なところ、渡航前の不安は小さくはありませんでした。しかしながら、5週間くらいであれば生活はそこまで大変ではありません。また、共同研究を始めて小さな結果を得ることも難しくはないように思います。そういうわけで、5週間というのは最初の滞在としてはちょうどよい長さだったのかもしれない。いきなり数カ月間あるいは数年間にわたって海外渡航するとなると気後れしてしまうという方は私のほかにもいらっしゃるかもしれません。そういった方はとりあえずどこかで短く滞在するという経験してみるとよいのではないかと考えています。実際、今の私はもっと長い滞在でもうまくやれると思っていますし、そういう機会を得たいと強く願っています。

末筆ながら、今回の滞在中を支援してくださったOR学会ならびに準備期間や滞在中にお世話になった方々に心より感謝いたします。来年度以降も研究者海外研修支援事業は実施されるとのことですので、この事業を通して今後ますます海外との交流が盛んになり、日本におけるORの研究がますます盛り上がることを期待しています。

## OR学会会員の皆様へ

本事業は2017年より開始しました(毎年2名派遣)。本年度のみ「60周年記念事業」として派遣いたしました。2018年度からは通常事業として派遣をいたします。すでにHP・OR学会機関誌には募集要項を掲載しております。(国際理事 武田朗子)